

第1回 魅力ある教育環境のあり方検討委員会 議事録

日時：令和8年6月29日（月）18時～20時20分

会場：珠洲市民図書館 会議室

出席者：

			所 属	氏 名	備 考
委 員	1	保護者代表	上戸小学校 PTA	加藤 宗和	
	2		飯田小学校 PTA	新 勇人	
	3		直小学校 PTA	吉田 孝宏	副委員長
	4		若山小学校 PTA	岡田 高志	欠席
	5		正院小学校 PTA	小谷内 隆之	
	6		蛸島小学校 PTA	増田 渉	欠席
	7		みさき小学校 PTA	畠口 孝幸	
	8		緑丘中学校 PTA	藤瀬 政寛	
	9		三崎中学校 PTA	谷内 幸	
	10		宝立小中学校 PTA	坂尻 倫昭	
	11		大谷小中学校 PTA	村上 ゆり	
	12		つばき保育園保護者	田喜知 康大	
	13	地区代表	宝立地区区長会 会長	多田 進郎	
	14		上戸地区区長会 会長	吉田 亮	
	15		飯田地区区長会 会長	泉谷 信七	欠席
	16		若山地区区長会 会長	奥家 康志	
	17		直地区区長会 会長	高井 正裕	
	18		正院地区区長会 会長	坂尻 孝司	
	19		蛸島地区区長会 会長	梧 光洋	
	20		三崎地区区長会 会長	辻 一	
	21		日置地区区長会 会長	糸矢 敏夫	
	22		大谷地区区長会 会長	丸山 忠次	
	23	学校関係者	珠洲市校長会 会長	河元 智志	
	24		珠洲市教頭会 会長	桑名 和宏	
	25	学識経験者	金沢大学 准教授	加藤 隆弘	委員長
事 務 局	珠洲市		珠洲市長	泉谷 満寿裕	
			珠洲市教育長	吉木 充弘	
			珠洲市教育委員会事務局長	山口 茂樹	
			珠洲市教育環境魅力化推進室長	倉見 倫代	

1 開会

開会挨拶 珠洲市長 泉谷 満寿裕

本日はご多忙の中、ご出席いただきありがとうございます。金沢大学の加藤委員には、遠路出席いただき感謝申し上げます。

珠洲市では 2005 年から 2006 年にかけて少子化の進行を踏まえた教育環境のあり方検討会を設け、その結論を受け、2012 年に宝立小中学校、2016 年に大谷小中学校を義務教育学校として開校した。その後、学校の耐震化という大きな課題を抱えながらも「地域と学校は一体である」との考えから、学校をなくすことで地域の活力が衰えることを懸念し、できる限り現状を維持する方針で進めてきた。しかし、令和 6 年能登半島地震を機に、児童・生徒数は震災前と比べて約 3 割減少し、年間の出生数も 35 名から 20 名へと減少している。宝立小中学校、大谷小中学校を除く多くの学校施設は老朽化しており、学校を維持する場合は、いずれ各校舎を新たに建て替える必要が生じる。財政面において相当困難である。そのため、あらためて魅力ある教育環境のあり方を考え、学校統合について市全体で答えを見出す必要がある。

前回の検討会は、商工会議所、農協・漁協、老人クラブ、女性団体など各種団体の代表で構成されていた。今回は、各学校の保護者代表、各地区の区長会長、校長会、教頭会、つばき保育園の関係者など当事者に近い構成とし、意思決定につながる議論を進めたい。

昨年度は各学校の保護者に、つばき保育園の保護者も含め、この課題について意見交換を進めてきた。意見を踏まえると小学校 1 校、中学校 1 校だけでは選択肢が少なすぎるため、複数校を残す方向も考える必要がある。大谷小中学校については、保護者と地域から存続を求める強い要望があるため残したい。また、統合小学校・統合中学校に加え、選択肢として宝立小中学校も残せないかという思いがある。ただし、宝立小中学校を残した場合も、現在の児童・生徒が必ずそのまま通うべきということではない。統合小学校や統合中学校に通いたい児童・生徒の意思は尊重すべきであり、逆に宝立地区以外の児童・生徒が宝立小中学校に通いたいという選択もあり得る。大きな課題は、みさき小学校と三崎中学校をどうするかである。三崎中学校は現在 2 年生がいない状況であり、3 年生が卒業し、来年度の新入生がいない場合は 2 年生だけが残ることになる。中学校の教育環境としては厳しいため、三崎中学校を先行して緑丘中学校と統合することも検討すべきである。一方で、みさき小学校については、通学時間なども踏まえ、残すべきか、統合小学校に移るべきかを慎重に考える必要がある。

新たな学校整備についても検討が必要である。既存校舎の老朽化を考えると、どこかの学校に全てを集めることは難しい。新たに小学校を建設する場合、緑丘中学校の一部を解体してその敷地内に建設するのか、別の場所に建設するのか、緑丘中学校そのものも将来的に新築するのかなど、複数の選択肢がある。運動場、プール、体育館をすべて整備する場合は大きな予算を要するため、他施設との共用も含めて検討すべきである。復興に向けて、児童・生徒、保護者、地域の人々が希望を持てる学校のあり方を目指す必要がある。統合した場合でも、各地域の伝統文化を継承し、各地域に子どもたちの声が響くような取り組みを同時に考えなければならない。

2 委嘱状交付

委員への委嘱状は、手元に配布した委嘱状をもって交付に代える。検討委員会委員一覧のとお

り、保護者代表、地区代表、学校関係者、学識経験者など、幅広い分野から 25 名の委員に就任いただいた。

3 委員長・副委員長の選出

委員長については、学識経験者として出席している金沢大学の加藤委員にお願いすることが承認された。副委員長については、保護者の視点を色濃く反映させる必要があるため、直小学校 PTA 会長の吉田委員にお願いすることが承認された。

加藤委員長挨拶

金沢大学教職実践研究科で、主に現職教員の学び直しと現場への還元に関わっている。珠洲市には研修で以前から訪れていたが、本格的には 2011 年頃から、授業改善等のテーマで複数の小中学校に関わってきた。本検討会では、それぞれの立場から忌憚のない意見を出し合い、子どもたちが楽しく、しっかり学び、魅力を感じられる教育環境を作ることを目指したい。容易な議論ではなく、意見がぶつかることも想定されるが、建設的に積み上げながら、よりよいものにしていきたい。

吉田副委員長挨拶

直小学校 PTA 会長の吉田である。飯田で育ち、実家は狼煙町である。進学後、大阪や東京でデザインの仕事に携わり 6、7 年前に U ターンして珠洲に戻った。現在は直地区に住み、子どもが直小学校に通っている。複数の地域や学校の立場をある程度理解できるため、その視点から考えていきたい。

児童・生徒や保護者にとって希望となる、魅力ある教育環境を整えることが重要である。今の大人が魅力的と感じるかどうか以上に、子どもたちやこれからの子育て世代が魅力や希望を感じられるか、それが判断の視点となる。学校統合や新校舎建設は目的ではなく、教育環境を魅力的にするための手段である。珠洲は教育資源・地域資源が豊富であり、それを潜在力のまま終わらせず、教育プログラムとして子どもたちに提供できる形に磨き上げる必要がある。「前に立つな、横に立て」という言葉のとおり、保護者、学校、行政、地域が向き合って対立するのではなく、子どもの方を向き、横に立ってともに考える委員会にしたい。

4 議題

- (1) 魅力ある教育環境のあり方検討委員会設置目的について・・・資料 1
- (2) 珠洲市の教育環境の現状と学校再編案について・・・資料 2
- (3) 検討委員会設置目的及び今後のスケジュールについて・・・資料 3

5 意見交換

加藤委員長

ここからは委員による意見交換に移る。本日の意見交換は、事務局から提示された再編パターン A、B、C の 3 案に絞り、それぞれの立場から意見を求める。案 A は集団教育と地域バランスの

両立、案 B は集団教育効果を最優先、案 C は通学負担や地域コミュニティの重視という位置づけである。

谷内委員

自分の子どもは現在、中学校にも小学校にも通っている。案 A、B、C を見たうえで、みさき小学校を維持する案 C を希望する。現在、三崎町杉山に住んでおり、年明けにも若い家族が移住してくる。既に移住した若い夫婦もいるため、こうした移住者に三崎町に根づいてほしい。そのためには、中学校は人数的に厳しいとしても、小学校だけでも三崎地区にあることが望ましい。三崎から緑丘方面へ通うとなると通学が大変になるため、少なくともみさき小学校は残してほしい。

加藤委員長

まずはブレインストーミングとして、各委員が持っている考えを出し合い、そこから整理していきたい。

多田委員

全体として、校舎の老朽化は大きな問題である。安全で安心して学べる場所を確保する意味では、統合自体にはおおむね同意できる。一方で、三崎には I ターンで来ている知人もおり、震災後も帰らずに残ると言っている。珠洲には魅力があり、みさき小学校は他校に比べれば校舎も比較的新しい。

将来的には新しい学校へ移ることも考えられるが、宝立小中学校は残してほしい。珠洲のよさを残すこと、安心して学べること、地震があっても学べる教育環境があることは、外から見ても重要である。現時点では案 C に賛成寄りであるが、結論はまだ出せない。

加藤委員長

地域の魅力を生かし、来てくれた若い世帯がその地域に残れるようにする視点が示された。

辻委員

案 C がよいと考える。仮に学校が 1 校になると、毎朝 12、3 キロメートルをバスで移動することになり、小学校 1 年生には大きな負担となる。地域エゴではないが、残してほしいという思いがある。また、公民館と小中学校の子どもたちが協力して活動しているが、学校がなくなると公民館活動が続くのかも気になるところだ。

加藤委員長

三崎地区からは、学校だけでは発掘しきれない地域の魅力を公民館が支えているとの意見が出ている。公民館と学校が連携し、地域の魅力や防災について子どもたちと考える取り組みは、今後も何らかの形で継続すべきである。

吉田委員

案 A、B、C のいずれでもよいが、早く進めるべきである。新しい学校を建設し、教育環境を整

えれば、一度珠洲を離れた保護者も戻ろうと考える可能性がある。子どもの立場からも、新しい立派な校舎ができれば行きたいと思うのではないかな。小さな分校や校区を残す仕組みがあってもよい。また、統合した場合、新しい校名で出発することになるかもしれないが、飯田、上戸、直、正院、蛸島などの小学校は 150 年以上の歴史がある。歴史をゼロに戻すのは残念であり、どこかの名前を残して統合することも考えられる。

村上委員

自分は移住で珠洲に来た。移住先として珠洲を選んだ理由の一つは、小学校が複数あり、珠洲市が義務教育に力を入れている印象を受けたからである。現時点で具体案を十分に想像できているわけではないが、宝立、大谷、三崎、飯田の中心部というように地理的に学校が分散している案 C がよいと感じる。また、学校に行けない子どもや行き詰まった子どもにとって、1 校しか選択肢がないとさらに行き詰まる可能性がある。可能であれば選択肢は多く残す方がよい。

加藤委員長

学校を複数残す場合、それぞれの学校のメリットや大切にしている価値を明確にし、将来の保護者に理解してもらうことが重要である。都市部では規模の大きい学校が選ばれがちであるが、小規模校にも教育効果がある。イメージだけで選択されるともったいないため、学校の特色を伝える必要がある。

辻委員

保育所が現在 1 つしかないことも考える必要がある。保育所で一緒だった子どもたちが、小学校で案 C により三崎へ戻る形になると、やや違和感がある。他地区の保育所が今後どうなるかも含め、保育所再開の話と学校再編はつながるのではないかな。

泉谷市長

保育園は教育委員会とは所管が異なるため私から回答する。できればみさき保育園も宝立保育園も再開したい。ただし、宝立保育園は老朽化や修繕規模の面で課題が多く、みさき保育園も復旧工事の入札が不調で進んでいない。復旧できたとしても、保育士などスタッフを確保できなければ再開は難しい。保護者の通勤動線を考えると、宝立保育園については、つばき保育園の方向に向かう保護者が多く、不便が比較的小さい可能性がある。一方、三崎や外浦方面では、つばき保育園に子どもを送った後、戻って仕事に向かう保護者もいるため、現状ではみさき保育園の再開を優先したい思いがある。保育と教育は別と考えていたが、保育園では一緒だった子どもたちが小学校で分かれることへの違和感もある。施設の復旧と保育士確保が課題である。

加藤委員長

遠隔交流学習などを活用すれば、保育園で一緒だった子ども同士が、画面越しに学び合うこともできる。保育から小学校へのつながりを考え、つなげる教育のあり方を運用していくことも重要である。

糸矢委員

学校は小学校であれ中学校であれ、地域の拠点であり、1つでもあった方がよい。地域のことを公民館に任せるといっても、公民館長は非常勤、主事もパートタイマーであり十分な体制とはいえない。地域のことをきちんと教えるとなると、結局は区長などが動員されることになる。学校がなくなると、地域にスタッフがいなくなる。校舎や体育館が地域にあることには大きな意味がある。日置地区には体育館がなく、旧体育館は倉庫のようにになっている。地域に学校があり、先生がいることは非常に大きい。

人数を考えると、これ以上学校を増やすことは難しいが、できるだけ多く残ってほしい。まず考えるべきは、建物をどうするか、人数をどうするかではなく、「何を教えるか」である。素晴らしい義務教育を実現するために、どこにどんな建物が必要かを考えるべきである。お金の効率だけを前提にするなら、珠洲に住み続ける必要はなく金沢でよい。珠洲らしい面白い教育を行い、珠洲を出た人も帰ってこようと思える学校をつくる発想が必要である。提示された A、B、C 案はよく考えられているが、前提が財政や効率に寄りすぎている印象がある。

加藤委員長

財務省は文部科学省に対して効率化を求めてきた。その流れでは、適正規模という言葉のもとに学校を1つにまとめる方向が促される。そうした中で、珠洲市は比較的小さな学校も踏ん張って残そうとしている面がある。引き続き意見を出し合い、よい折衷点を探す必要がある。

谷内委員

昨年から感じていることとして、人数が少ないと、子どもたちが「やりきった」という達成感を味わいにくいことが懸念点である。学校行事でも先生方の手が多く入り、子どもたち自身が独自にやり遂げたという感触が薄い。今回、三崎では小学校と中学校の合同運動会を行った。中学生が小学生の面倒を見て、小学生が中学生の話を聞く形になり、人数が増えたことで、中学生は達成感を味わうことができたように感じた。少人数校のよさはあるが、自分たちが経験したような、いろいろな意見があり、ぶつかりながら過ごす達成感も、子どもたちに味わってほしい。

加藤委員長

縦割り活動には大きな価値がある。小学校低学年の頃はやんちゃだった子が、中学生になると下級生をよく見て関わる姿も見られる。一方で、ESD・SDGsの発表会のように、多くの人の前で発表し、質問や拍手を受けることで達成感を得る場も重要である。少人数のよさと、大人数のプレッシャーの中で活躍する経験の両方を用意することが、魅力ある教育を実施するうえで大切である。

河元委員

案 A、B、C のすべてにメリットとデメリットがある。学びの多様化が求められており、探究活動を中心に特色を出している小規模校もある。すべてを1つにまとめる考え方もあるが、複数の学校を残しそれぞれが特色を出すことも考えられる。さらに分散して学校を残しつつ、集合型の学習が効果的な場合には、複数校が1つの学校に集まって学習するような柔軟な形もあり得る。

加藤委員長

現役の学校管理職には、実際の子どもの様子や学校の可能性について、今後も積極的に情報提供をいただきたい。

高井委員

以前から市長は、地域に学校がないといけないという考えを持っていた。その一方で、子どもを持つ保護者の中には、児童・生徒数の減少を踏まえ、統合してほしいという意見もあり、直地区としても学校統合の要望書を出した経緯がある。最も大事なのは、今子どもを持つ保護者の意見ではないか。学校がなくなった後の地域コミュニティをどうするかは別途考えるべき課題であり、まずは子どもを中心に、保護者の意見を尊重すべきである。三崎や宝立の意見があるなら、直、飯田、上戸などの地域がそれに反対する必要はない。

加藤委員長

この会では、今子育てをしている世帯や子どもたちの意見を引き続き大事にしたい。

吉田委員

長年教員として働き、少ない年で 8 人、多い年で 36、7 人程度の学級担任を経験した。個人的な肌感覚では、15 人が一つのラインである。15 人を切ると、活力や切磋琢磨が弱くなる。15 人を超えると多様な意見や対立する意見が生まれ、授業にも面白さが出る。珠洲で育った子どもが一生珠洲で過ごすならよいが、多くの子どもは市外や都会へ出ていく。そう考えると、日常の学習の中で切磋琢磨できる環境を整えるべきである。

加藤委員長

人数について、実感に基づく重要な意見が出た。今後は、オンラインも含めて一定の人数で学ぶ機会を組み合わせることも考えられる。一方で、少人数の中で支援を受けながら力を伸ばす子どももいる。ある程度の人数の中で刺激を受けて伸びる子どもと、少人数が適する子どもの両方がいるため、複数の選択肢や可能性を残すことが提案されていると受け止めている。

吉田副委員長

案 A、B、C に共通しているのは緑丘中学校校区にある 6 つの小学校を 1 校に統合する点である。一方、意見交換会では、若山、正院、蛸島などで小規模校のよさや地域とのつながりを重視する慎重意見も見られた。前提として統合が示されているが、各地区の委員からも意見を伺いたい。

小谷内委員

案を見た時点では、「統合してしまうのか」という感覚があった。正院は慎重派である。統合にも存続にもメリット・デメリットがある。保育所が統合された際には、園の行事として「奴振り」がなくなり、難しさを感じた。他の地域でも同じようなことが起きているのではないか。

小学校は児童数が 10 人を切っている。15 人が一つのラインという話を聞き、そうなのかもしれ

れないと感じた。一方、少人数だからこそ保護者が関わりやすい。イベントがあれば、ジュースや菓子を持って行ける人数である。中学校では授業参観などで他の保護者もいるため、自分が行かなくてもよいかという気持ちになり、距離を感じる。通学路で地域の人が子どもに「いってらっしゃい」「おかえり」と声をかける風景が好きであり、大勢になると関わりが薄くなるのではないかという心配がある。

テレビで、漫画を描く活動に力を入れる高校の事例を見た。いじめにあいそうだった生徒が、その部活動や授業で力を発揮し、賞を得て、後輩から尊敬される存在になっていた。人数が減っている中でも、非常に魅力ある学びがあれば県外から人が来るのではないか。木工や、復興に必要な建築に関わる授業など、珠洲ならではの学びを受け持つ学校があってもよい。老朽化の問題もあるため、どちらがよいとは言えないが、魅力ある学校が必要である。

加藤委員長

この場では高校の議論は中心ではないが、高校へどのような子どもを送り込むかは重要である。入試のあり方も変わり、総合型選抜が私立だけでなく国公立大学でも広がっている。早い段階から自分のやりたいことや仕事にしたいことを探究し、専門家とつながり、発表してきた子どもが評価される流れがある。地域の特性を生かし、何かにのめり込んで学ぶことは、将来の進学や仕事にもつながる。AI の発展により、ものづくりなど人でなければできない学びの価値も改めて重視される。

畠口委員

みさき小学校の保護者代表として出席している。事前に保護者や児童に合併への賛否を聞いたが、明確な反対も賛成もなかった。今回 A、B、C の選択肢が示されたため、可能であれば案 C のようにみさき小学校を残す形で統合できればよいと考える。現在、みさき小学校は三崎中学校と合同で運動会を行い、相撲大会もある。今後統合が進む中でも、小学校が合同で集まり、運動会や相撲大会などを賑やかに行える機会があるとよい。

加藤委員長

学校を含めた地域活動について持続可能な形をあらためて作っていくことが、今後の重要な課題となる。

吉田副委員長

案 A と案 C では宝立をどう扱うかが論点となるため、宝立の当事者からも意見を伺いたい。

坂尻委員

自分は生まれてから宝立で育ち、子どもも宝立に通っている。宝立を残したい思いはある。学校がなくなると地域が廃れるという思いもある。本来はすべて残したいが、現状を踏まえると厳しいことは理解している。個人的には案 C がよい。宝立は地域が広く、少人数ならではの強みも体現してきた。一方で、縦割りの中で社会性や言葉遣い、競争力の低さといった課題も見えてきた。ICT の活用や遠隔交流により、分散していても競争力や社会性を高めることは可能ではないかと

期待している。今後は人口推計やまちの復興状況も踏まえ、子どもたちが残ってくれる魅力ある地域にするため、まちづくりとも連携して努力する必要がある。今年度、宝立小中学校の入学生は1名であった。その子は保育所で仲のよかった友達と分かれ、1人で通学しなければならず、1週間ほど毎日泣いて通学していたと聞いた。上級生が一生懸命フォローしていたが、泣きながら通学する姿を見るのは心苦しかった。今後どの形が最もよいかについて、現時点で明確な答えを出すことは難しい。

加藤委員長

友達と一緒に保育園に行っていたのに、小学校で1人になるという点は考えなければならない。正院などでも同様の状況が起こり得る。

加藤委員

上戸小学校についても、娘が入学する年は、女の子は1人の予定である。男子3人、女子1人となることへの心配がある。学校には楽しく行ってほしい。泣きながら1人で行くような状況になるのであれば、飯田に通わせる選択も考えたい。子どもが楽しくない、学校に行きたくない、つらいと感じる選択肢は避けてほしい。

新委員

学校は残した方がよいと考える。議論をふまえると案Cになるのではないかと。どこに何を建てるか、どこに何を残すかという点では、魅力ある学校や施設をつくりたい。建てる側の人間としても悶々としている。次回までにPTAで集まる機会があるため、意見を取りまとめて報告したい。

加藤委員長

各地域やPTAで話し合う機会があれば、地域の人々がどのように考えているかを持ち寄っていただきたい。

藤瀬委員

人数の多い学校、少ない学校にはそれぞれ良さがある。子どもが少人数を好むタイプであれば、自由に行けるような制度があるとよい。また、人数の少ない学校ではPTAの役などが頻繁に回ってくるのか気になる。案A、B、Cのいずれの場合でも、大谷小中学校は特色ある教育を行う学校として進めていくという理解でよいか確認したい。

事務局（倉見教育環境魅力化推進室長）

その予定である。案A、B、Cのいずれでも、大谷小中学校は特色を出す形で進める。

田喜知委員

つばき保育園の保護者代表であり、現在蛸島に住んでいる。蛸島も統合小学校の対象に入っており、令和12年4月の開校を目指すこととなっている。娘は現在年長で、来年度は蛸島小学校に通う予定である。ランドセルも準備し、蛸島小学校の前を通ると「来年あそこに行く」と楽しみ

にしている。地域コミュニティの観点では、学校がなくなると地域が一気に寂れるという思いがある。一方で、「数は力」という言葉もあり、人数が多いことで学びの環境が整い、多様な考え方に触れられる良さもある。部活動の地域移行も進んでいるが、珠洲では昔からバスケットボールや野球に力を入れ、県大会や全国大会で活躍してきた。人数減少により勢いが弱まっている面があるため、この機会に魅力ある部活動や課外活動が増えてほしい。

子どもが大人になってからも、小中学校の同級生と集まり、生涯スポーツを楽しめるような関係は素晴らしい。統合によって同級生が増え、大人になってからも出会いやつながりが広がる面がある。地域の考えはあるが、一保護者としては統合に賛成であり、皆の意見を聞いたうえでは案Cがよいと感じる。

加藤委員長

保育園の保護者として、これまでの議論を整理するような意見をいただいた。

丸山委員

親、子ども、地区、それぞれに考えがあり、どの選択肢がよいかは簡単に言えない。子どもが十分に多ければ、そもそもこの選択肢はなく、各地区に学校があればよい。問題は、子どもが少なくなっていることであり、どうしようもない面がある。

大谷小中学校はいずれの案でも残る形になっているが、もし校舎が古かったら残してもらえなかったのではないかと感じる。幸い校舎が新しく、また峠を越えた遠い地域にあるため、通学・通園を考えると大谷に学校があった方がよいと判断されたのではないか。さらに、子どもや保護者がどう考えるかも重要であり、もし保護者が「人数の多い学校へ行きたい」と言えば、残らなかった可能性もある。将来的に子どもがいなくなれば、閉校せざるを得ない。器があっても、中身となる子どもが居続ける必要がある。大谷では、移住や留学など、子どもや保護者に来ってもらう仕掛けを考えているが、寝るところ、住むところ、食べるところがないと来ること自体難しい。地域として、どのようにそのような環境を確保するかを考えていきたい。

加藤委員長

大谷には10年前に新しい校舎が整備され、魅力ある学校として継続してきた。現在も少人数の中で子どもたちは頑張っている。今後も魅力を作り続け、来てくれる子どもが継続的にいる状況をどう作るのが重要である。先週見た英語の授業でも、2学年が一緒に学び、子どもたちは積極的に話していた。

高井委員

この会議は、最終的には統廃合ありきで進むのか確認したい。地域に小中学校が残るのが一番よいが現実には難しい。提示されたA、B、C以外の4つ目の案はないのか。統合反対ではなく、ABCのどれにするか、また魅力ある学校をどのように作るか、どこに作るかを話し合う場なのか。

泉谷市長

どうしても飯田小学校を残してくれという意見があれば、話は違ってくる可能性もある。

高井委員

令和 12 年 4 月に統合小学校が開校したとしても、児童数はおそらく 130 人弱、学年平均では 20 人程度であり、決して大きな学校ではない。統合しても多い人数ではなく、今後も減っていく可能性がある。移住者に来てもらうことは大事だが、減る人数の方が多い可能性もある。したがって、少ない人数の中で魅力ある学校をどう作るかの議論が重要である。

加藤委員長

自分が初めて正院小学校を訪れた頃は各学年単級で 25 人程度いたが、今は非常に少なくなっている。日本と海外とでは事情が異なるが、ヨーロッパでは 15 人から 25 人程度であれば先生の目が届くという考え方である。20 人程度の規模をしばらく維持できるように、子どもが継続して来る状況を作ることが大切である。同時に、小規模校でも特色ある取り組みを行い、安心して学べる状況を作る複線的な考え方が必要である。地域から見ればすべて残したい思いは当然ある。一方で、震災で校舎が傷んでおり、他の自治体では一気に統合して建て替える決断をした例もある。地域の拠点としての学校と、教育力・安全性とのバランスを見ながら協議する必要がある。

梧委員

各地域に学校が残るのが一番望ましい。自宅前を子どもが通り「おはよう」とあいさつし、「ただいま」と帰ってくる風景がなくなるのは寂しい。大谷小中学校をどうするかは論点ではないか。大谷はこの先、児童・生徒数が非常に少なくなり、ゼロになる可能性もある。地すべりなどにより家を再建する意欲が持てない人もおり、外浦地区を含めて人口が減っていくのではないか。そうした中で大谷の学校を残すのか。他の利活用が考えられるなら、その方がよいのではないかとも思う。大谷や保護者の方には失礼かもしれないが、率直な意見である。

泉谷市長

震災後、若い方を中心に 74 名が移住してきたと把握している。その中でも大谷・外浦が多いという肌感覚がある。実際に若い方々が大谷で頑張っている。震災以前から大谷小中学校は特例校として、市内のどこからでも通える学校に位置づけている。保護者や地域からも何とか残してほしいとの要望があるため、残す方向で検討を進めたい。

辻委員

望めば残してくれるのか。

市長

誰が望めばよいのかは難しい。地域として望むのか、子どもたちが望むのか、保護者が望むのか、それぞれ違う可能性がある。先日、直小学校と飯田小学校の 4 年生が市長室に来た際、学校がなくなることについて聞くと「嫌だ」と答えた。今の学校が楽しいからである。一方で、新しい学校や新しい校舎、プールができるとしたらどうかと聞くと、それはそれで楽しみにする様子もあった。子どもたち、地域、保護者の思いは必ずしも一致しない。だからこそ、みんなで答え

を見出す必要がある。地域、保護者、子どもたちの意見をできる限り取り込みたい。AI のように、あらかじめ 100 点満点の答えがあるわけではない。

高井委員

子どもたちは一緒になればすぐ仲良くなるのか、という点も気になる。

加藤委員長

一緒になる学校がある程度見えてきた段階で、子どもたちにも、どのような学校にしたいかを考えてもらい、子ども同士で話し合う場を作る必要がある。長野県山ノ内町では、複数の小学校が義務教育学校になる過程で、地域や子どもも参加して学校づくりを進めている。子どもたちが「自分たちの学校である」という意識を持てる仕掛けが必要である。

泉谷市長

今後のスケジュールの中で、子どもたちの意見を聞く場を設けたい。可能であれば、自分が直接子どもたちと意見交換する場を作りたい。

吉木教育長

昨年度から「珠洲市子ども未来創造会議」として、珠洲の未来を考えるワークショップを実施している。市内小学校 4 年生から 6 年生と中学校全生徒を対象に、各学校から Chromebook でオンライン参加し、代表者には会場に集まってもらう方法で全員が同じ場で意見交換した。今年度も継続し、子どもたちの意見を吸い上げながら取り組みたい。

糸矢委員

子どもに意見を聞く場合、何も知らないまま話させてもよい意見は出にくい。いろいろな学校のあり方や面白い教育を見たり、他校と交流したり、事前に勉強したうえでワークショップを行うべきである。田舎で人数が増えた学校や、大規模校でできることなどを学んだうえで意見を聞く必要がある。

吉田副委員長

その指摘は重要である。私は書籍デザインの仕事を通じて、広島県教育長を務めた平川理恵の取組を紹介する本に関わる機会があり、教育改革の内容の一端を知ることができた。その際、自分の経験だけで教育を語ることは慎重でなければならないと感じた。大人は自分の成功体験や価値観を子どもに押し付けてしまうことがある。子どもも今の自分の環境しか知らない。

テレビ報道で、加賀市の小学校の事例を子どもたちと見た。一斉授業ではなく、子どもが自分のペースで廊下やソファのような場所、タブレットなどを使いながら学ぶ様子である。子どもたちは「こういう学校もあるのか」と反応しつつ、「こういう環境なら誰々はさぼるかもしれない」といった自分なりの考えも持っていた。子どもに多様な学校のあり方を見せることで、子どもなりの意見が出てくる。大人も、全国の先進事例や教育以外の事例を見ることで、地域でできる教育の発想が広がる。先日の教育フォーラムで県の浅野副知事から学んだような機会も、価値観を

更新するうえで重要である。今後の話し合いでも、先進事例を共有しながら検討を重ねたい。

多田委員

次回以降でよいので、教育委員会として、都市部や小規模校でどのような教育に取り組んでいるのか、リモートでの合同授業など、現在の方向性を紹介してもらいたい。それを受けて議論が広がると思う。

加藤委員長

今回は、各校の強みや今後の教育の方向性も紹介してもらいたい。子どもたちに単に意見を聞くだけでは、通り一遍の発表で終わる可能性がある。子どもたちが「自分たちの意見が実現する可能性がある」と感じると、本気度が変わる。時間はかかるが、そうした「耕し」の部分丁寧に行い、子どもたちの夢が少しでも叶う学校づくりにつなげたい。時間が経過しているため、意見交換はこのあたりで閉じる。この後も各自で考えを深め、次回以降も議論を続けたい。

6 次回の日程

令和8年 8月17日（月）18時～ 珠洲市民図書館

7 閉会

閉会挨拶 珠洲市教育長 吉木 充弘

委員の皆様には、ご多忙の中、夕方の遅い時間から「第1回魅力ある教育環境のあり方検討委員会」に出席いただき感謝申し上げます。委員長を引き受けていただいた加藤委員、副委員長を引き受けていただいた吉田委員には、初回会議の円滑な進行に感謝する

本日は事務局から、児童・生徒数の推移、学校施設の現状、市長と保護者との意見交換会の報告など、現在の珠洲市が直面している教育環境の姿を説明した。その後の意見交換では、それぞれの立場から、珠洲市の子どもたちの未来を真剣に思う貴重な意見や示唆に富む提言をいただいた。現在、市内には小学校7校、中学校2校、義務教育学校2校の計11校があり、子どもの数より教職員の数が多い学校も複数ある。いずれの学校でも、きめ細かな教育が特色を生かして実践されている。しかし、5年後、10年後を見たとき少子化がさらに進むことから、学校のあり方を考えることは避けることのできない極めて重要な課題である。これは単に学校をどうするかという議論ではなく、これからの珠洲市を担う子どもたちが、どのような環境であればより豊かに、より調和をもって学び育つことができるかという、珠洲市のまちづくりそのものである。保護者代表、地区代表、区長会長、PTA、教職員、専門的知見を持つ加藤委員など、多様な視点が合わさることに本委員会の大きな意義がある。本日を出発点として、今後さらに議論を深め、珠洲市ならではの魅力ある教育環境の最適解を導き出したい。次回以降も忌憚のない意見を願います。